



登場人物

安倍晴士郎（あべのせいしろう）：江戸幕府奉行所の同心 安倍晴明の子孫

千代：晴士郎の妻 幼なじみで美人で気風がいい

猫又：晴士郎の家に住みついた猫の妖怪 人間に化けられる

おかる：長屋の大屋 噂好きのおかみさん

良寛先生：長屋に住む医者

庵主様：尼寺・正月院の住職 晴士郎の良き相談相手

甚太（じんだ）：晴士郎の友達の少年 寺で暮らす孤児

好六：おかるの亭主 婿養子でおかるに頭が上がらない

葉売り：謎の病に効くという薬を売り歩く和苦珍堂（わくちんどう）の主

お岩ちゃん：四谷怪談のお岩 恨む事にも飽き、ややヤンキー化した

雨女：この女が現れると雨が降る。妖怪か人間かは判別できていない

利休：千利休の霊魂 茶道の始祖だが今では酒好きに

妙江（たえ）：茶屋の看板娘

陰古炎座（いんふるえんざ）：鬼の総大将 江戸で猛威を振るう

市川鈴之助：晴士郎の上司 剣の達人だがお化けが大の苦手

宮藤忠正（くどうただまさ）：晴士郎の同僚の同心

客A

客B

雌猫

町民

男たち

同心たち

お奉行様

◆其の一

晴士郎の暮らす長屋。いつもの朝の様子。表に出て伸びをする晴士郎。

晴士郎「ふあー・・・良い天気だ。三寒四温、春はまだまだかな」

おかる「おはよう、今朝も冷えるねー。どうだい、晴士郎？風邪なんかひいてないかい？」
晴士郎「おはよう、おかるさん。風邪？引くわけないだろう？拙者は日々、鍛えているからな」

おかる「それならいいけど。このところ江戸中で悪い風邪っぴきが増えてるって言うからね」

晴士郎「そのようだな」

おかる「まあ、可愛い嫁さん貰って幸せに暮らしてりゃ病気も逃げ出すよ。熱っつい熱っついってね(笑)」

晴士郎「やめてくれよ、お千代と俺は子供の自分から飽きるほど一緒に」

おかる「だけど、油断しちゃだめだよ。風邪も夫婦(めおと)もね(笑いながら帰る)」

晴士郎「わかった(笑)まいったな」

家に戻る晴士郎。

晴士郎「くー寒い、火鉢に火を入れるか」

猫又「むにやむにや・・・ふ、ふ、ふぎゃー!!!」

晴士郎「なんだ、猫又！？寝てたのではないのか!？」

猫又「ふー、ふー・・・夢か？」

晴士郎「夢？なんだおどかすなよ」

猫又「ネズミが・・・」

晴士郎「ネズミ？ネズミがどうした？」

猫又「こーんなでつかいネズミがあたいを襲ってきたんだよ・・・怖かったー・・・」

晴士郎(笑)それは災難だったな。もう、起きろ。そろそろ飯だぞ」

猫又「嫌な予感がする」

晴士郎「どんな？」

猫又「わかんないけど、とんでもない事が起きそうな気がする」

晴士郎「気のせいだよ。さ、布団上げろ。千代にまたどやされるぞ」

猫又「ふん、野生の勘を信じろって言うの」

千代が帰ってくる。

千代「おはよう、起きたかい?・・・コホッ」

晴士郎「おう、千代、おはよう。どこに行ってたんだ?」

千代「朝ごはんのおかずをいただきにね。知り合いの漁師が栄養つけろってくれたのさ、コホッ、風邪が流行ってるからって」

猫又「漁師？」

千代「ああ、佃島の・・・(ふらつとよろける)」

晴士郎「あ、おい、どうした？具合でも悪いのか？」

千代「朝からなんだか少しめまいがして。でも大丈夫だよ。それよりこれ」

晴士郎「おお、アジの干物か。朝から豪勢だな、うまそう」

千代「本当に美味しそうなアジ・・・(倒れ込んでしまう)」

晴士郎「おい、千代！しっかりしろ！・・・こりゃひどい熱だな、どうしたのか・・・そうだ、猫又、良寛先生を呼んで来い！」

猫又「えー、でも、まだ猫のまんまだし」

晴士郎「だったら誰かに化けて行けばよいだろう？早くしろ！さあ！」

猫又「わかったよ、じゃあ行ってくる」

晴士郎「頼んだぞ・・・千代」

布団に寝かされた千代。良寛先生が診察をしている。

晴士郎「先生、どうなんですか？千代は大丈夫ですか？」

良寛「うむ・・・ま、風邪だとは思うが、どうも今年の風邪はたちが悪い。高熱が続き、江戸でもかなりの死者が出ている」

晴士郎「死者・・・まさか千代も」

良寛「まあ、大丈夫だとは思うが、しばらく様子を見よう」

晴士郎「様子を見る？じゃあ、薬を出してください。それを飲ませて」

良寛「ないんじや」

晴士郎「ない？」

良寛「ああ。この風邪に効く薬は江戸中探しても、いや日本中探してもない。手の施しようがないんじや。すまん」

晴士郎「そんな・・・」

良寛先生が帰った後。

晴士郎「千代・・・拙者は何もしてやれんのか・・・ふがない、くつそう！」

猫又「そう取り乱すな。お前が騒いだって千代の病が治るわけじゃにやいだろう？」

晴士郎「そんなことは分かってる！ただ、千代が不憫で・・・」

千代「(目を覚ます)・・・晴士郎」

晴士郎「千代！目が覚めたか！？よかった・・・大丈夫か？」

千代「うん・・・すまないね・・・朝飯は食べたかい？知り合いにもらったアジの干物が」

晴士郎「そんなものはどうでもいい。お前こそ何か食べたいものは無いか？何でも用意する。栄養つけて寝ていれば治るそうだからな」

千代「水・・・お水が飲みたい」

晴士郎「水か、わかった。おい、猫又、水！」

猫又「はいはい」

千代「あら？おかるさん」

晴士郎「いや、あれは猫又だ。良寛先生を呼びにやったので、その時に化けてそのまま。おい、猫又、もう猫に戻ってよいぞ」

猫又「ああ。にやおん！（もどる）はい、水」

千代「ありがとう（水を飲む）・・・ふー・・・」

猫又「また寝ちゃった」

晴士郎「たしかに普通の風邪ではないようだな。それになにやら・・・よし、出かけてくる。猫又、千代を頼んだぞ」

猫又「え？おい、晴士郎？どこ行くの？おいつてばー！」

飛び出していく晴士郎。

◆其の二

尼寺・正月院。

庵主「それは大変でしたね。それで、お千代は大丈夫なのですか？」

晴士郎「はい、ひとまずは静養をとり様子を見ることに」

庵主「そうですか。早く良くなると良いですが」

晴士郎「庵主様、いかがお思いにられますか？こたびの風邪は、なにやら普通の風邪とは思えません。医者によれば薬もないとか」

庵主「ええ、噂には聞いています。なんでも鳥が病をばらまいているとか、かかった者と目が合うと病がうつるとか。嘘か真か分からない話に皆が惑わされて、あろうことか長屋を追い出された者もいるとか」

晴士郎「そうなのです。奉行所でも対策を考えているのですが、これがなかなか・・・」

庵主「人の口に戸は立てられませんからね」

晴士郎「どうしたらよいのでしょうか？」

庵主「実は昨夜、占って見たのですよ」

晴士郎「おう！それで如何様なご託宣が？」

庵主「それが」

甚太がお茶を持って走ってやってくる。

甚太「お茶をお持ちしました！晴士郎の兄ちゃん、こんにちは！」

庵主「これ、甚太、本堂で走ってはならないと何度言えばわかるのですか？」

甚太「ごめんなさい、庵主様・・・でもおいら、兄ちゃんと早く遊びたくて」

晴士郎「はははは、わかったわかった。庵主様との話が終わったら少しだけ付き合おう」

甚太「本当！？やったー！」

晴士郎「少しだけだぞ。千代が病で伏せているからな」

甚太「お千代姉ちゃんが！」

帰り道、物思いにふける晴士郎。

.....
本堂での回想。

庵主「どうやら、己の欲のために病をばらまいている妖怪がいるようです」

晴士郎「やはり・・・」

庵主「そなたも感じましたか？」

晴士郎「はい・・・寝ている千代から邪悪な影を感じました。猫又も妙な夢を見たそうです」

庵主「敵はおそらく・・・」

晴士郎「おそらく？」

庵主「人心を欺き、心の隙間に入り込もうとする、見えない鬼」

晴士郎「・・・・・・・・」

晴士郎「見えない鬼か・・・」

歩いていくと、街角の辻で人だけが出来てざわついている。

晴士郎「なんだ？ずいぶん大勢集まってるな・・・ごめんよ、ちよつと見せてくれ」

好六「痛てえな、押すんじゃねえよ！順番守りやがれ、このすつとこどっこい！あ、晴士郎じゃねえか」

晴士郎「好六さん、なんなんだい？この人だかりは」

好六「ああ、これかい？これはな、南蛮渡来の妙薬の薬売りよ」

晴士郎「薬売り？」

好六「ああ。なんでも今はやりの風邪にことのほか効くってんで評判になってな、ご覧のような有様よ」

晴士郎「それは本当かい？あの薬を飲めば千代も治るのか？」

好六「おい、お千代に何かあったのかい？」

晴士郎「それが例の風邪のようで、今朝から急に容体が悪くなり、今家で寝込んでいる」

好六「そりえてえへんだな。あとでおかるにも様子を見に行かせるよ」

晴士郎「いや、そいつは嬉しいが、おかるさんにうつしたりしたんじゃ申し訳がない。何かあれば相談に行くと言えてください」

好六「わかった。お、始まるようだぞ」

用意が済んだ薬売りが口上を始める。

薬売り「寄ってらっしゃい見てらっしゃい！東に赤子の鳴く声あれば、行って飲ませるゲンノシヨウコ、西に老婆の悲鳴を聞けば、腰に膏薬、万能ドクダミ！南蛮舶来出何処は言えぬが一粒飲めば立ちどころに病が消え去る！その薬というのがこちらでございます！」

民衆「おー！」

薬売り「さてさてお立合い」

好六「おい、薬屋！前口上はもういいからよ、早く薬を売ってくれ！こいつの女房が今朝からひどい風邪ひきなんだ」

薬売り「まあまあそうに焦らず。それでは皆さんお待ちかねだったようなので、今日は早速お薬の販売を始めましょうか。お蔭様で私も忙しい身ですからね、ひひひひひ」

晴士郎「薬屋、流行風邪（はやりかぜ）に効く薬があるというのは本当なのか？」

薬売り「おやおや、これはお待さま。はい、本当でございますよ」

晴士郎「同心の阿部晴士郎だ。妻がひどい熱で。医者には薬は無いと言っていたが、本当に効くのか？その薬は」

薬売り「お疑いになるのは勝手ですが、ほかに何か手立てがおありですか？」

晴士郎「いや、それは・・・」

薬売り「ならばお試ください。さ、どうぞ、こちらです」

晴士郎「これが・・・いかほどだ？」

薬売り「お代は結構です」

晴士郎「そういうわけにはいかぬ」

薬売り「いえいえ、構いませんよ。お試しいただいて効果があれば、お奉行所にご推薦下されば」

晴士郎「奉行所に？」

薬売り「お上の方でも打つ手がないと聞きました。大口に仕入れていただければ私の方も商売繁盛、町中で行商する手間も省けます。どうぞ、お持ちください。阿部様」

晴士郎「しかし・・・」

薬売り「さあさあ、並んでください！大丈夫、薬は売るほどありますからね。いらしゃい、いらしゃい、和苦珍堂のお薬はこちらですよ！」

好六「俺も一応買っとくか。おい、こっちにもくれ」

薬売り「ありがとうございます！」

晴士郎「和苦珍堂・・・」

次々に薬を買う人たち。

◆其の三

晴士郎の家。昼時。

心配で見に来ている利休とお岩ちゃんと雨女。

利休「うゝむ・・・」

お岩ちゃん「どうした？利休の爺さん」

利休「茶柱がな・・・立たん」

猫又「ツグ、なんだよそんなことで、大げさだな」

利休「大げさとはなんじゃ！？わしの煎茶占いを馬鹿にするのか？」

猫又「そうじゃないけど、何もこんな時に」

雨女「それで？どんな様子なの？その番茶占いは？」

利休「煎茶じゃ！番茶じゃないわ」

お岩ちゃん「もう、茶茶茶うるさいな！早く言えよ！」

利休「つく・・・どうやら、江戸に鬼が入った様じゃな」

猫又「鬼？」

利休「ああ、そうじゃ」

お岩ちゃん「角が生えてて、牙がこーんなで、裸で金棒持つてる、あれ？」

利休「ははは。桃太郎の絵巻物に出て来るような鬼は、それを書いた絵師の想像じゃ。または、海で船が沈没して流れ着いた赤毛の南蛮人だという話もあるがな」

お岩ちゃん「へー」

雨女「じゃあ鬼って本当はどんな姿なの？」

利休「鬼か？鬼というのはな、姿かたちを持たんのじゃ」

猫又「姿かたちが無い？」

利休「ああ。目に見えず、気付かぬうちに人の内にもぐりこみ、その者をいつの間にか操っている。それが鬼じゃ」

雨女「なんだか怖い」

お岩ちゃん「妖怪が何怖がっての？」

雨女「だって、私、半分人間なもの」

猫又「そんだけ雨に濡れて平気なんだから風邪なんかひかないよ」

雨女「もう、いじわる」

利休「とにかく、早いところ千代が治ると良いな」

猫又「そうだね」

お岩ちゃん「晴士郎は？」

猫又「朝方飛び出したまんま、それきり」

走って帰ってくる晴士郎。勢いよく戸を開け、

晴士郎「ただいま！お千代、薬だ！薬があったぞ！」

街道沿いの茶屋。昼下がり。

忙しく立ち働く看板娘の妙江。

客A「ごちそうさん、勘定ここ置くよ」

妙江「毎度ありがとうございます。またお越しを」

客B「ごめんよ。だんごと茶をくれ」

妙江「はい、ただいま。(陰古炎座の席に来て) お酒、お持たせしました」

陰古炎座「ありがとうございます。あ、お姉さん、これあげるわ」

妙江「え？なんですか？これ・・・薬？」

陰古炎座「そう。悪い風邪が流行っているだろう？もしかかったりしたらこれをお飲み。すぐに良くなるから」

妙江「どんなお薬なんですか？」

陰古炎座「これ？これはね、私の血」

妙江「え・・・」

陰古炎座「ははははは、嘘よ。大丈夫だからもらってちょうだい」

妙江「・・・はい、それじゃあ、ありがたく頂きます」

陰古炎座「名前は？」

妙江「妙江です」

陰古炎座「妙江さん、いい名前ね」

そこに薬売りがやってくる。

薬売り「お待たせしました」

陰古炎座「やつと来たわね。それじゃ妙江さん、お銚子もう一本」

妙江「はい(下がる)」

薬売り「珍しいですね。市井のものとお話しされるなど」

陰古炎座「たまにはね。息抜きよ。それで、首尾はどう？」

薬売り「はい、万事うまくいっておりますよ。薬は飛ぶように売れています。そのおかげで今日も約束の時刻に遅れてしまった次第です。申し訳ございません」

陰古炎座「良かったわね、儲かって」

薬売り「はい、お蔭様で」

陰古炎座「だけど、まだまだこれからよ。もっともつとこの病を流行らせなければ。さすれば薬も更にどんどん売れる。お互いのためにこれからも協力しないとね。そうでしょ？和苦珍堂」

薬売り「はい、よろしくお願いいたします。それで、次の薬の材料の方は」
陰古炎座「持ってきたわよ。はい、どうぞ」

薬売り「今日はまた大量ですね。大丈夫ですか？」

陰古炎座「別に何ともないわよ。体中の血を抜いたってね。ふふふ」

晴士郎の家。

晴士郎「どうだ？お千代？」

千代「だいぶ良いようだよ。それにしても、良く効くお薬だね。高かったらろう？」

晴士郎「それがただでくれたんだ」

利休「ただ？薬屋がただで薬をくれたって？うゝむ、大丈夫なのか？」

晴士郎「拙者も少しそう思ったんだが、一刻も早くお千代に飲ませたくて・・・」

お岩ちゃん「だけど効いたんだから良くない？」

雨女「そうね。あつという間に顔色も良くなって」

猫又「アジ食べる？焼き直そうか？」

晴士郎「そう言えば拙者も腹が減ったな。あわてて朝飯抜きで飛び出してしまったから。

猫又、すまぬが拙者の分も」

猫又「自分でやれ」

晴士郎「んぐっ・・・」

千代「だけど晴士郎、こんなに効くなら本当に奉行所でなんとか出来ないのかしら。薬代が払えない人もいるだろうし、この薬を知らない人もたくさんいるはずだし」

晴士郎「そうだな。よし、これから早速・・・いかん！奉行所を無断で休んでしまった！」

みんな「えー！？」

◆其の四

奉行所。

市川「馬鹿者！」

晴士郎「はい、申し訳ありません！」

市川「同心が無断で奉行所を休むなど言語道断！」

宮藤「あ、でも市川様、夕刻とはいえ阿部もこうして一応出てきたわけですから、何卒ご
穩便に」

市川「ならぬ！確たる上は武士のけじめをつけよ！」

宮藤「と言いますと？」

市川「切腹じゃ！」

宮藤・晴士郎「切腹——！？」

宮藤「市川様、それはあまりに重い処分、どうか今一度お考えお改めを、どうか！」

市川「ならぬと言っておろう！宮藤、介錯じゃ！そちが阿部の介錯をせい！」

宮藤「えー！私ですか！？それは何卒ご勘弁を！私と阿部は寺小屋の時分から席を共にし、苦学の末、奉行所に上がったのも同期、その知己の友をこの手にかけるにはいささか理由が・・・」

晴士郎「宮藤、もう良い・・・さすれば、安倍晴士郎、死んでお詫びを申し上げる！宮藤、介錯を！拙者の最後、とくと見届けてくれ！」

宮藤「晴士郎！」

晴士郎「宮藤よ！」

市川「もう良い。冗談じゃ」

宮藤「冗談・・・？」

晴士郎「・・・助かった」

市川「良く言うわ、腹など切る気もないくせに」

晴士郎「・・・ははあ！」

市川「それで、如何様な理由でこんな刻になったのじゃ？」

晴士郎「はい、市川様。それがですね・・・」

市川「んく、なるほどな。流行風邪（はやりかぜ）にめっぼう効く薬か。それを奉行所の方でまとめて買えと、そう申しておるんだな？その和苦珍堂とかいう薬売りは」

晴士郎「はい。いかがいたしましたよう」

市川「どう思う？宮藤」

宮藤「そうですね、今のところ他に打つ手もありませぬゆえ、ここは試しに薬を買い上げてみてはいかがでしょうか？何か問題が起きた際は、すべてその薬売りに責任を取らせれば良いかと」

市川「ほう、なるほどな。ふふふ、宮藤、お前も悪よのう」

宮藤「これもすべて市川殿の影響にございます、ぬふふふ」

市川「よし決まった。その和苦珍堂とやらを呼べ。すぐにでも江戸中に薬が行きわたるよう手に配するのじゃ。頼んだぞ、阿部、宮藤」

晴士郎・宮藤「は！」

次の日。荷を運んできた和苦珍堂。

薬売り「これで在庫の分は全部でございます。誠に今回の素早い英断、さすがは江戸奉行所でございますねー！」

市川「うおっほん、民のことを一番に考えるのが我らの務め。当たり前のことをしたまでだ」

薬売り「さぞかしみな喜ぶでしょう。買えば安くはないこの薬をただで宅配りになるなんて、きつと後世までこの偉業は語り継がれると存じます。本当にありがとうございます」

市川「そ、そうか？あ、あははははは・・・語り継がれるか・・・そうかそうか」

宮藤「市川様、準備が整いましたゆえ、我らはこれより江戸中を回り薬を配ってまいります」

市川「よし、頼むぞ」

晴士郎「和苦珍堂さん、ご苦勞様でした。これでまた江戸に平安が戻ることでしょう」

薬売り「いえいえ、こちらこそお役に立てて光榮でございます。次の薬は出来次第またお届けに上がります。それでは私はこれで（帰っていく）」

宮藤「行くか、晴士郎」

晴士郎「ああ」

江戸の町。薬を乗せた大八車を引き、練り歩く晴士郎と宮藤たち。

宮藤「我らは江戸奉行所である！流行風邪の特効薬を配りに来た！代金はいらぬゆえ、所望するものはこちらへ並ぶがよい！」

女「本当ですか！？子供の熱が下がらず往生していたのです！助かります！ああ、神様、仏様、お奉行様！」

晴士郎「さ、はやくこれを持ってお帰りなさい」

女「ありがとうございます！（走って帰る）」

晴士郎「良かった」

宮藤「ほら、晴士郎！ポーとするな、どんだん配るぞ！」

晴士郎「ああ！さあ、流行風邪の特効薬だ！代金はいらんぞ！」

集まってくる民衆。大喜びで薬をもらう人たち。

薬売り「（陰から見ている）陰古炎座様、うまくいきましたね」

陰古炎座「ふっ、馬鹿な奴ら。どうなるのかも知らないで」

薬売り「あなた様が歩いただけで広がる流行風邪。同じ空気を吸っただけで映る病とは長い薬屋稼業でも聞いたことがありません。げに恐ろしや恐ろしや、ヒヒヒヒ」

陰古炎座「私の体が出す鬼の気を吸って起こる病。しかし本当に恐ろしいのは、それを直す薬の方。やつら、あの薬がなから出来ているのかを知ったら、さぞや驚くであろうなあ？」

薬売り「左様で」

陰古炎座「私の血を固めて作った丸薬。それを飲むことでみなは私と一つになる。いずれ、江戸中の人間が、いや、この国のすべての者が私の僕（しもべ）となり、従うことになるのだ」

薬売り「私はすでにあなたの僕でございます」

陰古炎座「ふっ、この金の亡者が（笑）」

薬売り「はい、たと儲けさせていただきました。しかも奉行所のお墨付きで（笑）」

陰古炎座「じきに始める。楽しむがよい」
薬売り「はい、楽しみにしております」

去っていく二人。

猫又「(屋根の上) 聞いちゃった、聞いちゃった。こりや大変なことになるな」
雌猫「ねえ、どこ行くのよ、離れたら寒いわ。もつと一緒にお昼寝しましょうよ」

猫又「そうしたいのはやまやまだけど、ごめん、帰るね、みんなに知らせなきゃ！(屋根をつたって急いで帰る)」

雌猫「あ、ちよつと猫又！なによ、もう、馬鹿！知らない！・・・あー寒い」

晴士郎の家。走りこんでくる猫又。

猫又「たいへん、たいへん！お千代、アタイすごい話聞いちゃった！」

千代「どうしたの？猫又、そんなにあわてて」

猫又「晴士郎のやつ騙されてるんだよ！」

お岩ちゃん「騙されてる？いったい誰に？」

猫又「薬売り！例の薬をくれた薬売りだよ！」

みんな「えー！？」

猫又「隣の呉服屋の屋根の上で親友の寅子と昼寝してたらさ、なんだか怪しげな二人組がそこそそ話してるもんだから気になって盗み聞いたら驚いたのなんの！一人は晴士郎が話してた和苦珍堂って薬売りだったのさ」

雨女「もう一人は？」

猫又「うーん、たしか、陰古炎座様とか呼んでたな」

利休「そいつは何か言っておったか？」

猫又「それがね」

晴士郎が帰ってくる。

晴士郎「ただいま！いやあ、みんな喜んでくれて拙者もうれしい。明日はもつと薬を配らねばな。ん？どうした、みんな、変な顔をして」

千代「晴士郎・・・」

晴士郎「えー！？病をばらまいてるやつと薬売りが結託してるだって！？どういうことだ？猫又」

猫又「つまり、流行風邪はおそらく、陰古炎座っていう妖怪か悪鬼の仕業で、薬っていうのは陰古炎座の血液でできてるってわけ」

お岩ちゃん「そしてそいつを飲めば風邪は治ると」

雨女「どうして治るんだろう？」

利休「良くはわからんが、毒を持って毒を制するということじゃないのかのう。ほれ、毒蛇でも毒蜘蛛でも自分の毒では死なんじやろ。あえて体内に毒を取り込むことで毒と一緒にするというような」

晴士郎「毒と一緒になる？」

猫又「それから、その陰古炎座ってやつ、じきに始めるとか言ってたけど」

お岩ちゃん「始めるって何を？」

雨女「きつと良いことじゃないわよねえ？」

晴士郎「迂闊だった・・・俺としたことが・・・くそっ！どうしたらいいんだ！」

千代が急に苦しみます。

千代「うぐっ、げは、うぬぬぬ・・・ぐえー！」

晴士郎「どうした、千代！？苦しいのか！？すっかりしろ！」

千代「離せ！・・・私に近づくな・・・鬼がうつる・・・きえー！（走り出ていく）」

晴士郎「あ、千代！（追おうとする）」

利休「待て、晴士郎！」

晴士郎「利休・・・なぜ止める！？」

利休「始まったのじゃ・・・何が！」

◆其の五

町中を暴徒が駆け巡っている。家々を壊し、略奪と暴力が横行している。

千代を探しに出た晴士郎と猫又。

晴士郎「千代ー！どこだー！？どこにいるんだー！？千代ー！」

猫又「いないね」

晴士郎「どういうことだ！？どうしてみんな急に狂暴になってしまったのだ！？千代まで・・・やめろ、家を壊すな！こらっ、盗みやめぬか！？やめろと言っておろう！（町民を峰打ちする）」

町民「ぐはっ！」

宮藤が走ってくる。

宮藤「晴士郎ー！」

晴士郎「宮藤！これはいったいどうなってるのだ！？」

宮藤「わからん！だが来てくれ！奉行所が襲われている！」

晴士郎「なんだと！？誰に？」

宮藤「町民が薬をよこせと言って、門を破ろうとしている。流行風邪のせいで務めを休みの者が多く、手薄のところを突かれた」

晴士郎「くそう、陰古炎座め！」

宮藤「陰古炎座？」

奉行所。暴徒が門を破ろうと大騒ぎをしている。

おかる「お開け！ここに薬があるのはわかってるんだよ！」

好六「薬をくれー！おらあ、もうあの薬なしじゃ一時もいらねえんだ！早くここを開けねえかー！」

妙江「もたもたすんじゃないよ！開けろったら開けろ！この薄ら馬鹿の侍ども！」

千代「丸太を持ってきてー！ほら、しっかり持って、行くよ！せーの！」

男たち「よいしょー！（門にドーンと丸太をぶつける）」

千代「せーの！」

男たち「よいしょー！（ドーン）」

千代「もうちよつとだよ！せーの！」

晴士郎が走って来る。

晴士郎「千代！」

千代「は！・・・」

晴士郎「いったい何をしている？」

千代「・・・」

晴士郎「何をしてるんだ！？」

千代「うるさい！せーの！」

男たち「よいしょー！（ドーン）開いたぞー！」

雄たけびを開けてなだれ込む民衆。

晴士郎「千代！千代ー！」

宮藤「くそつ、破られたか！仕方ない、門を閉めろ！奴らを奉行所内に閉じ込めるのだ！」

晴士郎「宮藤、待ってくれ！千代が」

市川「阿部！気持ちはわかるが今は私心を捨て、同心として事の收拾に心血を注げ。よもや人間の仕業とは思えん。お前の力が必要だ。陰陽同心、阿部の晴士郎としての力がな」

晴士郎「・・・わかりました！」

お岩ちゃんと雨女が、甚太と庵主を連れて走ってくる。

お岩ちゃん「晴士郎！待ってー！」

晴士郎「お岩！どうしたのだ！？庵主様、甚太まで」

雨女「あの後、利休のじいさんが庵主様に相談に行こうって」

猫又「じいさんが？どこにもいないけど？」

庵主「晴士郎、これを」

晴士郎「これは？」

甚太「口頭巾だよ！これを耳からかけて口をふさぐんだ」

庵主「利休から話は聞きました。奴と同じ空気を吸わぬよう、これで少しでも防御するのです」

甚太「がんばれよ、晴士郎の兄ちゃん！」

晴士郎「ああ、もとはといえば拙者の誤った判断が招いた災厄（さいやく）。必ずこの江戸から鬼を退治して見せる！」

甚太「よし！それでこそ兄ちゃんだ！」

晴士郎「うん。行くぞ、宮藤！お主も口頭巾を（走っていく）」

宮藤「おう！（後を追う）」

市川「秘密の裏口を使え！ほかの者も口頭巾をつけるのじゃ！」

同心たち「は！」

利休「(やっとする) はあはあ・・・ひー、苦しい、お岩！雨女！年寄りを大事にせんか！」

猫又「おっそいんだよ、いつもいつも。よし、アタイも助太刀だ！（所内へ向かう）」

奉行所内。大騒ぎで薬に群がる民衆。

陰古炎座「あはははは！そうだ、好きなだけ薬を食らうがいい。そうすれば更にお前らは私と一つになるのだ！われの血を食らい、われに従え！われの悪鬼を自らに宿せ！この江戸を、この国を、われら鬼の楽園に作り変えるのだ！あははははは！」

晴士郎「そこまでだ！陰古炎座！」

陰古炎座「だれだ、お前は？おう、これはこれは、我が血の丸薬を江戸中にばらまいてくれた最大の功労者ではないか！よく来たね、さ、お前もたんとお上がり」

晴士郎「ふざけるな！おい、猫又、例の口頭巾を！早く！」

猫又「はいよ！それ！」

晴士郎「(口頭巾をつける) これでよし！」

陰古炎座「ほう、わたしの秘密に気付いたようだね。だがもう遅い、江戸は私がいただくよ。江戸は鬼の町に生まれ変わるのさ！」

晴士郎「そうはさせるか！臨兵闘者皆陣列在前！（りんびょうとうしゃかいじんれつざいせん）良（うしとら）の鬼門を放て！」

鬼門が開き、たくさんのほかの鬼、魔物が奉行所に入ってくる。

陰古炎座「な、なんだ！？貴様、何をした！？やめろ、鬼を呼ぶな！良の鬼を呼び込むじゃない！やめて、やめておくれー！」

晴士郎「やはり！お前、江戸の良（うしとら）の鬼門から来た鬼ではないな！？この奉行所には結界を引いているのだ。拙者が印を結ぶ間、外からも内からも出入りはかなわぬ」

陰古炎座「わかったから許しておくれ！お前の言う通り、私は坤（ひつじさる）、江戸の西南の裏鬼門から来た鬼じゃ。このままでは良の鬼たちに食い殺される・・・助けて、やめさせておくれ、うあー！」

猫又「鬼が鬼を食らってる・・・」

晴士郎「東と西の鬼は古くから敵対しているんだ」

陰古炎座「ぎゃー！！・・・」

晴士郎「臨兵闘者皆陣列在前！（りんびょうとうしゃかいじんれつぎいせん）良（うしとら）の鬼門を閉じよ！」

陰古炎座もろとも鬼門に吸い込まれて消えていく鬼たち。

猫又「全部、吸い込まれていった・・・晴士郎が勝ったんだね」

宮藤「やったな、晴士郎！」

晴士郎「ああ・・・千代は？千代は無事か！？」

千代「晴士郎・・・」

晴士郎「千代！良かった！大丈夫か？どこか怪我はしていないか？」

千代「ここはどこ？」

晴士郎「奉行所だ」

千代「奉行所？どうして私、奉行所なんか・・・？」

ざわざわと我に返る民衆。

おかる「あら？ここはどこだい？いたたた、なんでこんなところ擦りむいてるんだろうね、いたたた・・・」

好六「おかる、お前こんなところで何してるんだ？」

おかる「やだよ、あんたこそ着物がボロボロじゃないか、みっともない男だね」

好六「そういうおまえだって、髪はぼさぼさ、前がはだけて大根足が丸見えだぞ」

おかる「きや！ふざけんじゃないわよ、女房に恥かかす亭主がどこにいるんだい！（殴る）」

好六「いた！てめえ亭主の頭殴りやがったな！もう許さねえ、こっちこい！簀巻きにして隅田川に投げ捨ててやる！」

おかる「やれるもんならやってみな！その前に切り刻んで江戸のカラスにくれてやる！」

好六「なにをー！？」

晴士郎「まあまあ二人とも、仲良くしてくれ」

好六「うるせえ、ほっといて・・・なんだおめえか」

おかる「晴士郎」

晴士郎「せっかく流行風邪が退散したんだ。楽しく暮らさないとまったくないぞ」

おかる「そうなのかい？　そういや気分がすっきりしてるね」

好六「俺はいつだって仲良くしてえよ。なんたってたった一人のでえじな女房だからな」

おかる「あんた・・・やだよ、この人ったら（つねる）」

好六「いって！・・・帰るか」

おかる「あいよ、あんた」

キツネにつままれたような気分で帰っていく人々。

千代「なんだか悪い夢を見ていたようだよ」

晴士郎「そうだな、本当に悪い夢だったのかもしれないな」

庵主と甚太が来る。

甚太「晴士郎兄ちゃん！」

晴士郎「おう、甚太！・・・庵主様」

庵主「毒を以て毒を制す、鬼を以て鬼を制す・・・見事でした」

晴士郎「あいつはなぜ人々を従わせようとしたのでしょうか？」

庵主「この世を変えたかったのかもしれませんが」

晴士郎「この世を変える？　乱世にですか？　地獄にですか？」

庵主「さあ・・・でも、物事は見る方向によってまったく逆に見えるものです。鬼には鬼の道理があつたのかもしれませんがね」

晴士郎「鬼には鬼の道理・・・」

庵主「春はもう少し先でしょうかね」

千代「早く春がくればいいですね」

晴士郎「そうだな」

晴れ渡る冬の青空。

奉行所の御白州。

お奉行様「面を上げい。その者、鬼と結託し江戸を混乱におとしめた罪は非常に重い。よって和苦珍堂主を鬼が島への島流しに処する。これにて一件落着！」　おしまい